

『グローバル世紀への挑戦—文明再生の智慧』 文理閣

序章 文明再生のために

一 内からのグローバリゼーション

幸泉 哲紀

一 本書が目ざすもの

英語の *globalization* という語、日本では外来語として「グローバリゼーション」とカタカナで表記されているが、中国では「全球化」と漢字に訳されている。この中国語訳は、すべてのものを地球規模のものに変えるという、もとの英語の意味をうまく捉えている。というのは、グローバリゼーションは、地理環境、政治体制、文化慣習の違いを超えて、人々の触れ合いの場をまさに地球規模にまで拡大してきた社会変化の過程だからである。その触れ合いも経済取引や文化交流における人と人の直接的な触れ合いに限られず、今では教育や趣味におけるインターネットを通しての間接的な触れ合いにまで拡大してきている。

インターネットの普及によるグローバリゼーションの情報空間への広がりとともに、グローバリゼーションに関する研究書や解説書など、文献の数も近年飛躍的な増加を見ている。インターネット検索で出てくる数万にも上る文献の数からすると、グローバリゼーションの意味やその影響についてはすでに論じ尽くされているのではないかと思う読者もあろう。しかし、二〇〇八年の「世界経済溶解」(Global Economic Meltdown) というグローバル・キャピタリズムの危機とそれにどう対処するかについて今日なお続いている論争を見れば、世界の論壇からはグローバリゼーションをどう理解し、それがもたらしてきた問題にどう対処していけばよいのかについて説得力をもつ議論の方向は見えてこない。それは、グローバリゼーションを「外からの」、「上からの」、「下からの」社会変化として捉えてきたこれまでの議論には、本書で展開される「内からのグローバリゼーション」という重要な分析の視点が欠けているからである。本書は「内からの」視点からグローバリゼーションの分析を行い、その本質を解明し、それがもたらしてきた問題にどう対処すべきか、その方向を示すことで、われわれ GN21 が『地球村の行方』、『地球村の思想』、『下からのグローバリゼーション』といった一連の著作で行ってきた考察・議論の完結を目ざすものである。

二 混成文化・文明社会としての地球社会

どの個人も、ある文化・文明を背景にもつ社会の一員としての生活を行っている。そして、どの社会も資源の利用における自然環境との関わり、ヒト、モノ、情報の行き来における他の社会と関わりに見られるように、開かれたシステムである。開かれたシステムとしての社会と社会との接触については、征服や植民地化といった暴力的なものもあれば、思想や社会制度などの文化・文明要素の借用や相互交換といった友好的なものもある。いずれにせよ、五千年を超える文化・文明の歴史を通しての接触により、その度合いは社会により異なるけれども、今日ではどの社会も純粋な文化・文明ではなく、ハイブリッドな文化・文明をもつ混成文化・文明社会である。インターネットに代表される二十世紀後半の情報技術革命は、文化・文明の混成化を「全球化」することで、まさに地球規模での混成文化・文明社会である地球社会を生み出したのである。

地球社会は混成文化・文明社会であるけれども、すべての人々が共通の帰属意識をもって共生のできる「ふるさと」となるためには、まだまだ厳しい問題を抱えている。実際、グローバリゼーションによる情報網の広がり、個人や社会集団間の価値観の違いを一層鮮明にし、その結果、多くの個人や社会集団は原理主義的な文化・文明観に固執し続け、世界の各地で血なまぐさい民族や宗派間の抗争をひき起こしている。また、グローバル・キャピタリズムの浸透は、先進国と発展途上国との間や国内における貧富間の経済格差を縮小することなく、むしろ拡大している。それは、貧富差が情報へのアクセスの格差という形で現れ、現在の情報世界での富の獲得における「勝ち組」と「負け組」の差をさらに拡大するからである。グローバリゼーションがもたらしてきたこれらの問題を理解し、それらを解決する方向を見いだすためには、これまでの「外からの」、「上からの」、「下からの」視点からのグローバリゼーションの分析では不十分である。

三 「自己発現」としての「内からのグローバリゼーション」

英語の *globalization* は *globalize* という動詞、それも他動詞の名詞形である。ということは、誰（何）が誰（何）をグローバル化するのか、グローバル化する主体と対象があって始めて意味をもつ。

「外からの」、「上からの」、「下からの」のグローバリゼーションは、グローバル化する主体や対象が、多国籍企業、国際機関、政府、地域社会、非政府組織、市民団体などである場合のグローバリゼーションである。

それでは、グローバル化する主体と対象が自分自身の場合はどうなのか。英語では、これは *one globalizes oneself* ということになる。この自らが自らをグローバル化する過程、これが「内からのグローバリゼーション」である。それは、自らが何ものなのか、何ができるのか、地球社会におい

て人間としての自らの可能性を発見し、実現していく人間発展の過程であり、端的に「自己発現」ということばで表すことができよう。「自己発現」としての「内からのグローバリゼーション」は、実は古来人類の叡智が追求してきた「いかに生きるべきか」という問いかけ、古代の文化・文明にさかのぼる長い歴史をもつ「真の人間のあり方とは何か、どうすればそのあり方を発見し、実現することができるのか」という問いかけにつながるものである。

四 地球社会における「自己発現」

「いかに生きるべきか」という問いかけは、確かに古くからされてきている。ただ、われわれが今日直面する問題は、人間発展が行われる生活空間が「全球化」された地球社会だということである。そこでは、自らが何ものなのかを発見する過程で自己が触れ合う他者は、身近な家族や友人に限られず、地球上あらゆる地域の個人や組織にまで広がっている。しかも地球社会においては、触れ合いの性格も、意見の相違、利害の対立、価値観の衝突から異文化を背景にもつ社会集団間の武力抗争に至るまで、容易にエスカレートしていく可能性を常に秘めているのである。

このような地球社会の現実のなかで、「自己発現」を達成することは容易なことではない。インターネットの普及は情報収集、知識修得、社会関係の開発などで新たな可能性を拓げる一方、人間としての自らの可能性を発見し、実現していくには極めて厳しい環境である。というのは、どの家庭、地域社会、国家も、地球規模で文化・文明が交錯し、衝突する地球社会の現実から個人を隔離することはできないからである。もちろん家庭や学校での教育の役割はあるけれども、究極的には、地球社会において「自己発現」を達成する責任は個人一人一人が負わなければならないのである。

われわれの身の周りに広がるさまざまな価値、考え、生き方が錯綜する地球社会において、自らの責任で人間としての自らの可能性を、そして人類の叡智が追求してきた真の人間のあり方を発見し、実現していくこと、それがわれわれの言う「自己発現」としての「内からのグローバリゼーション」である。自らを自らの努力で「全球化」することによって始めて、われわれは地球社会における自己と他者との関係性に目覚め、多様な文化・文明の共生と相互育成を推進する地球社会の実現に貢献することができるのである。

五 本書の構成

本書は三部で構成されている。第一部では、現在われわれの身の周りで展開されているグロー

バリゼーションが、個人を取り巻く生活環境にどのような変化をもたらしているか、そしてその変化が「自己発現」にどのような影響を与えているのかが示される。第二部では、古くからさまざまな文化・文明における叡智が展開してきた「いかに生きるべきか」の考えを振り返り、これらの考えが二十一世紀の混成文化・文明世界での「自己発現」に何を示唆するのが考察される。そして第三部では、地球社会という現実のもとで「自己発現」を助長するには、どのような社会システムが必要であるかが示され、これまでの混成文化・文明論では見えてこない二十一世紀世界に望まれる新たな文化・文明像が描かれる。